

流通科学部での学びの質向上へ向けた取り組み

— 学生アンケート調査の探索的分析を通じて —

Efforts to improve the quality of learning at the Faculty of Business, Marketing, Distribution, Nakamura Gakuen University

— Through the exploratory analysis of students survey —

中村学園大学 流通科学部

前 田 卓 雄

1. はじめに

中村学園大学流通科学部では、2019年度より新たに導入したカリキュラムにおける教育がスタートして今年度で3年目を迎える。2021年度から始まった第8次中期総合計画では、教育研究の目標として、育成すべき3つの人材像を掲げており、その中の1つに「学習目標を明確にし、その達成に努力し、将来、社会発展に大きく寄与することによって本学の建学の精神を具現化できる能動的な人材を育成する」という項目がある。そしてその具体的な中身は、「学生自らが学習目標を立て、自助努力によって、学習成果を実感できるような学習者目線に立った、しかも質の高い教育研究体制を整備することによって将来を嘱望される人材を多数輩出し、もって伝統に裏打ちされた建学の精神が具現化できる能動的な人材を育成する」となっている。この目標を達成するための教育研究方法としては、「3つのポリシー¹に基づく授業改善により学生満足度を高め、EdTech²等を活用した実学教育に挑戦し、ステークホルダーへの責任を果たす」ことが示されている。具体的な教育研究の成果としては、「高品質授業の提供と高水準研究の遂行を社会的な使命として達成し、学生を含めたステークホルダーから高い評価を獲

得する」ことを掲げている。いずれにせよ、学部教員が行う教育研究活動を通じて、学生から学園生活全般を通じて高い満足度を獲得することが求められていることになる。

先行研究では、学生生活の満足度については、坂田ほか(2007)では、「授業内容に満足している」や「大学の授業が面白い」といった項目で構成される「学業満足度」と「大学生生活の満足感」に有意な正の相関関係があることが実証されている。同様に、國眼ほか(2005)でも「大学入学後の学業に関する満足度」と「大学生生活の充実度」に有意な正の相関関係があることが実証されている。これらの先行研究からは、大学での学びそのもの、即ち、授業内容が学生の満足度に影響を及ぼしているとの示唆を得ることができる。

それでは、どのような授業が学生の満足度を高めるのであろうか。伊藤(2008)は、所属する大学の学部学生を対象としたアンケート調査の分析結果から、教員の話し方や質問への対応、配布資料といった教育方法よりも、「内容を理解しやすい授業」であったり「授業の内容は興味を持てるものだった」といった授業内容の方が、学生の満足度を高める効果が大きいことを実証している。そしてその上で、「学生を満足

1 アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー
2 Education (教育) と Technology (テクノロジー) を組み合わせた造語

させるためには、知的好奇心を刺激するような面白い授業を行うことが前提であり、それ無しに「教育方法」の改善を図っても意味がない」との結論付けを行っている。また、星野・牟田(2003)が行った所属する大学の学部生を対象としたアンケート調査の分析結果では、学生の授業に対する総合的な満足度が高まることで授業の理解度も増すことが示されている。

2. 本研究の目的

先行研究のレビューからは、授業内容の理解を促進することが学生の高い満足度を獲得することにつながるとの示唆を得ることができる。そこで本研究では、学生の授業満足に焦点を当てた探索的な研究を行うこととする。具体的には、本学部で新たなカリキュラムが導入された2019年度に入学した学生を対象に2020年1月に実施された授業満足度調査データの二次分析を行う。

本研究の目的は、新たに導入されたカリキュラムが有効に機能して学生の成長に繋がっているかを検証することにある。

3. 研究対象と方法

本学部では、2019年度に入学した流通科学部の学生274名を対象に2020年1月にアンケート調査を実施している。その中から、授業満足度に関係すると思われる質問30項目（以下、授業満足度）と自己の成長に関すると思われる質問34項目（以下、自己の成長）のアンケート結果を分析対象とした。（各項目については付録を参照）

なお、授業満足度に関する問いは「あなたにとって満足度の高い授業とはどのような授業ですか」であり、「そう思わない」から「そう思う」までを3件法で、自己の成長に関する問いは「あなたは流通科学部に入学してどれくらい成長したと実感していますか」であり、同じく「そう思わない」から「そう思う」までの3件

法で回答が得られている。

分析では、まず、「授業満足度」に関する30項目と「自己の成長」に関する34項目について探索的因子分析を実施した。得られた因子に対しては、信頼性分析を行って内的整合性と妥当性を確認した後、多変量解析を行って変数間の関係性を確認した。

4. 分析の結果

図表1は、「授業満足度」に対して行った探索的因子分析（主因子法）の結果である。因子回転はバリマックス法を採用しており、4つの因子が抽出された。そこで、各因子の内的整合性と妥当性を検証するため信頼性分析を行った。信頼性係数を示すクロンバックの α は、0.902~0.813の値を示しており内的整合性と妥当性は高いという結果であったことから、合成変数を作成して分析に用いることとした。

「授業満足度」に関しては、第一因子を構成する質問項目が授業の内容に関するものが多いことから、合成後の変数を「授業の内容」と名付けた。次に第二因子については、構成する質問項目の内容から「負荷の少ない授業」と名付けた。そして第三因子については、同じように「授業の多様性」と名付け、第四因子については、「教員との距離感」と名付けて分析に用いることとした。図表2は、「授業満足度」を構成する合成変数の記述統計の結果である。「授業満足度」を構成する因子の中で最も平均値が高かったのは、「授業内容」でバラつきも少なかった。逆に平均値が最も低かったのは、「負荷の少ない授業」で、バラつきも大きいという結果であった。

次に、「自己の成長」に対して探索的因子分析（主因子法）を行った。図表3はその結果である。因子回転はバリマックス法を採用している。その結果、4つの因子が抽出された。そこで、各因子の内的整合性と妥当性を検証するために信頼性分析を行った結果、クロンバックの

図表 1 「授業満足度」に関する因子分析の結果

項目	因子負荷量				固有値	Cronbach の α
将来に役立つ	.718	.068	-.060	.154	9.856	.902
新しい知識が得られる	.717	-.007	.082	.083		
やりがい・達成感がある	.712	-.033	.104	.153		
知識が深まる	.711	.032	.125	.062		
得意分野	.701	.040	.131	.120		
知的好奇心	.692	.034	.232	.081		
納得ができる	.672	.019	.240	.171		
資格取得に役立つ	.664	.128	.047	.203		
すぐ役に立つ	.647	.055	.157	.086		
主体的に取り組める	.647	-.010	.358	.020		
興味や関心がある	.633	.058	-.007	.089		
身近なテーマである	.584	.083	.298	.019		
楽しく夢中になれる	.571	.070	.139	.269		
試験がない	.026	.815	.171	.148	4.026	.899
授業が早く終わる	.107	.794	.141	.162		
出欠管理が甘い	.049	.793	.168	.038		
単位が取り易い	-.026	.791	.134	-.066		
試験が簡単	.094	.719	.005	.289		
Gr 活動がある	.103	.136	.651	.098	2.316	.832
フィードバックがある	.245	.105	.650	.193		
レポートがある	.038	.189	.624	.002		
外部講師の存在	.065	.201	.613	.008		
小テストで確認	.191	-.021	.579	.232		
多様な教材を使用	.285	.104	.511	.327		
他学生の真面目な取組	.386	-.038	.503	.308		
教員が親切	.299	.316	.122	.653	1.360	.813
教員とコミュニケーション	.217	.211	.394	.560		
正当な評価	.478	.079	.184	.516		
理解度に合わせた進捗	.340	.124	.333	.461		
教員の冗談や雑談	.054	.389	.360	.441		

回転：バリマックス

図表 2 「授業満足度」を構成する合成変数の記述統計

合成変数	平均	標準偏差
授業の内容	2.646	.370
教員との距離感	2.499	.452
授業の多様性	2.156	.458
負荷の少ない授業	2.096	.576

α は、0.958~0.874の値を示しており内的整合性と妥当性が高いことが確認できたことから、合成変数を作成して分析に用いることとした。

「自己の成長」に関しては、第一因子を構成する質問項目が、学生の自律性や主体性に関する内容に関するものが多いことから、合成後の変数を「自律性や主体性の促進」と名付けた。同様に第二因子については、学生が内省することによって成長を実感する内容が多くあることから「内省力の増進」と名付けた。そして第三因子については、質問項目の内容がコミュニケーション力の促進に関するものが多いことから「コミュニケーション力の促進」と名付けた。最後に、第四因子に関しては学部のある学びを通じた成長であることから「学部の学びを通じた成長」と名付けて分析に用いることとした。

図表4は、「自己の成長」を構成する各合成変数の記述統計の結果である。平均値の値は、「学部の学びを通じた成長」が最も高く、「コミュニケーション力の促進」が最も低いという結果であった。

分析では、まず、はじめに「授業満足度」と「自己の成長」の関係性を確認するために構成する因子間の相関分析を実施した。

相関係数の値に注目すると、最も相関が高かったのは、「授業内容」と「内省力の増進」で、次いで「授業の多様性」と「自律性自主性の促進」であった。相対的に「負荷の少ない授業」と「自己の成長」を構成する因子との相関は低く、「負荷の少ない授業」と「内省力の増進」、「学部の学びを通じた成長」とは無相関であるという結果であった（図表5参照）。

そこで、学生の「授業満足度」と自身の「自己の成長」との因果関係を明らかにするために、「授業満足度」を独立変数とし、「自己の成長」を従属変数として重回帰分析を行った。結果は、図表6に示すとおりである。相関分析の結果を通じて、多重共線性が疑われたが、確認した結

果、VIFの値は、全てのモデルで1.27~2.07の範囲内にあり、多重共線性の問題はなかった。モデルの調整済 R^2 の値は決して高くはないが、4つの重回帰分析の全てにおいて、1%水準で統計的有意な結果が得られている。

重回帰分析の結果からは、学生の「自律性や主体性の促進」、「内省力の増進」、そして「コミュニケーション力の促進」を図るためには、「授業の多様性」と「授業の内容」が効果のあることが実証され、「学部の学びを通じた成長」の実現は、「授業の内容」に起因することが明らかになった。

このうち、「授業の内容」は4つの従属変数全てに影響力をもっており、とりわけ学部での学びを通じて学生を成長させて行く上で欠くことのできない要因であるといえることができる。また、「負荷の少ない授業」と「教員との距離感」は、学部での学びを通じた学生の成長には寄与しないことも明らかになった。しかも、重回帰分析の結果では、統計的有意なデータとなっていないが、一部のベータの値がマイナスとなっていた。

5. 結論

本研究の分析の結果から、以下の結論を導出することができる。

- ①. 学部での学びを通じた学生の成長には、授業の内容と多様性が影響するが、とりわけ授業の内容が重要な要因となる。
- ②. 負荷の少ない授業や教員との距離感は、学部での学びを通じた学生の成長には寄与しない。

学部での学びを通じた学生の成長について、「授業の内容と多様性」が教員側に求められているということが明らかになった。図表1の「授業の内容」を測定する尺度の質問項目から、将来、役に立つ新たな知識を学生に提供しながら、やりがいや達成感が授業を通じて得られる

図表3 「自己の成長」に関する因子分析の結果

項目	因子負荷量				固有値	Cronbach の α
第三者視点で考えられる	.705	.300	.157	.140	17.829	.958
自ら進んで考察できる	.684	.302	.221	.227		
自分の考えを伝達できる	.676	.274	.375	.155		
筋道立って考察できる	.656	.252	.199	.241		
客観的に理解できる	.656	.245	.277	.259		
要点を伝える力がつく	.624	.205	.464	.108		
自力で解決できる	.622	.242	.317	.187		
学んだことを活用する	.615	.248	.246	.265		
問題解決の行動ができる	.614	.316	.273	.201		
進路を考えるようになった	.609	.237	.272	.211		
協働性が身に付いた	.575	.248	.357	.226		
問題解決力が付いた	.568	.275	.266	.230		
関心や問題意識を持つ	.554	.416	.170	.242		
他者理解する力が付く	.552	.339	.079	.399		
矛盾を気づく力	.550	.280	.401	.034		
協調性が付いた	.547	.319	.193	.371		
自ら進んで取り組む力	.535	.224	.345	.196		
グローバルに興味を持つ	.452	.196	.342	.306		
知識が増えた	.305	.626	.178	.289		
新たな発見が得られた	.364	.600	.320	.174		
自分の間違いを理解する	.417	.582	.214	.210		
授業理解力が付いた	.396	.560	.270	.233		
CLM からの刺激を受けた	.265	.553	.259	.264		
CLM との違いに気づく	.297	.534	.329	.292		
授業内容の理解力が付く	.327	.525	.381	.286	1.270	.897
自己主張できる	.354	.270	.728	.186		
伝達力が付いた	.349	.331	.695	.211		
自分の意見発信ができる	.346	.335	.628	.187		
ディベート力が付いた	.514	.212	.523	.229		
PC で文書作成できる	.180	.147	.118	.832	1.048	.874
PC で分析整理できる	.166	.187	.150	.789		
PC で情報収集できる	.212	.285	.176	.673		
流通分野に関心を持った	.460	.314	.127	.471		
経営分野に興味を持った	.436	.262	.232	.460		

CLM : クラスメイト PC : パソコン

回転 : バリマックス

図表4 「自己の成長」を構成する合成変数の記述統計

合成変数	平均	標準偏差
学部の学びを通じた成長	2.259	.482
内省力の増進	2.246	.445
自律性や主体性の促進	2.178	.437
コミュニケーション力の促進	2.133	.505

図表5 変数間の相関分析の結果

		自己の成長			
		自律性促進	内省力増進	Com 力促進	学部の学び
授業満足度	因子				
	授業の内容	.393**	.433**	.331**	.395**
	負荷の少ない授業	.148*	.070	.134*	.030
	授業の多様性	.417**	.350**	.350**	.254**
	教員との距離感	.340**	.236**	.236**	.242**

Com : コミュニケーション 数値は Pearson の相関係数 有意水準 : **P<1% *P<5%

図表6 「自己の成長」を従属変数とする重回帰分析の結果

		従属変数			
		自律性促進	内省力増進	Com 力促進	学部の学び
独立変数	授業の内容	.244**	.322**	.241**	.343**
	負荷の少ない授業	.007	-.068	.048	-.069
	授業の多様性	.281**	.197**	.273**	.102
	教員との距離感	.039	.063	-.076	.031
R ²		.277	.226	.164	.167
Adjusted R ²		.216	.214	.151	.154
F 値		19.80**	19.61**	13.15**	13.47**

Com : コミュニケーション 数値は標準化係数β 有意水準 : **P<1% *P<5%

ような工夫が求められているとの示唆を得ることができる。同様に「授業に多様性」については、グループ活動を行ったり、その活動結果やレポートのフィードバックを行うなど、いわゆるアクティブ・ラーニングや問題解決型授業(PBL)の実践が学生の成長に有効であるとの実践的含意を得ることができる。

6. おわりに

本研究は、中村学園大学流通科学部で2019年度より導入された新カリキュラムが有効に機能して学生の成長に繋がっているかを検証することを目的に学生の授業満足に焦点をた探索的な研究として実施した。2020年1月に実施された授業満足度調査のデータを二次分析した結果からは、学生の授業満足度と学生自身の成長に因果関係があることが実証された。本研究の授業満足度を構成する要素のうち、「授業内容」と「授業の多様性」が学生の「自己の成長」に統計的に有意な影響を与えていた。

今後は、本研究から得られた実践的な含意を精緻化して仮説を導出し、それを検証する仮説検証型研究を行って実証につなげていきたい。

最後に本研究の限界について述べる。本研究は、2020年1月に実施された授業満足度調査のデータを二次分析することによって、学生の授

業満足度と自己の成長の関係性の探索を試みたものであり、本来の研究目的を意図して設計・回収した調査データではなく、ここに本研究の限界がある。既述のとおり、探索的に行われた本研究結果の普遍的妥当性を確認する必要があることから、今後の研究の中でクリアし、本研究結果の妥当性を実証して行きたい。

参考文献

- 星野敦子・牟田博光 (2003) 「大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因」『日本教育工学会論文誌』27 (Suppl.) pp213-216.
- 伊藤征一 (2008) 「授業に対する学生満足度の構造」『星城大学研究紀要』(5) pp97-108.
- 勝矢光昭・小林みどり・福田 宏・山浦一保 (2006) 「学生満足度調査の結果とその分析」『経営と情報』19 (1) pp37-55.
- 国眼真理子・松下美和子・苗田敏美 (2005) 「文系学部生の大学生生活満足度・充実度と職業イメージとの関連：キャリア支援のための予備的検討」『金沢大学教育開放センター紀要』第25号 pp69-84.
- 見館好隆・永井正洋・北澤 武・上野 淳 (2008) 「大学生の学習意欲、大学生の満足度を規定する要因について」『日本教育工学会論文誌』32 (2) pp189-196.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩 (2007) 「新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』No.6 pp45-54.

付録 1

授業満足度に関する測定尺度

興味や関心が持てる	出欠管理が厳しくない
新しい知識が得られる	寝ていても単位が取れる
知識が深まる	テストが簡単である
自分の得意分野である	教員が親切である
やりがい・達成感がある	教員が冗談や雑談等をする
自主的主体的に取り組める	教員と学生のコミュニケーションがある
知的好奇心が高まる	正しく評価される
学んだことがすぐに役立つ	グループ活動がある
将来役に立つ	学生にフィードバックがある
身近なテーマである	レポートがある
資格取得につながる	学生の理解度に合わせてくれる
納得できる	映像やプリントなどの多様な教材がある
楽しく夢中になれる	小テスト等で学びを確認できる
早く終わる	他の学生も真面目に取り組んでいる
テストがない	外部講師がいる

付録 2

自己の成長に関する測定尺度

コンピューターを活用して必要な情報を収集出来るようになった	問題解決のために何が必要か、筋道を立てて考えられるようになった
収集した情報をコンピューターを使って分析・整理できるようになった	問題解決のための最適な方法を、自分なりに考え出せるようになった
分析・収集した情報をコンピューターを使って文章で表現できるようになった	目の前の問題を解決できるようになった
流通分野に興味・関心を持つようになった	物事の要点を他者にわかりやすく伝えられるようになった
経営分野に興味・関心を持つようになった	自分の考えを的確に表現し、伝達できるようになった
グローバル分野に興味・関心を持つようになった	他者の主張の矛盾点に気づくようになった
興味の有無に関わらず物事に進んで取り組むようになった	自分の主張と他者の主張の両方を踏まえて、議論できるようになった
物事に対して、学んだことをもとに関心・問題意識を持つようになった	物事の新しい見方に気づくようになった
学んだことを実際の状況に合わせて活用するようになった	授業内容に関する知識が増えた
他者の意見を丁寧に聞き理解に努めるようになった	いろいろな視点で授業内容の理解を深めるようになった
立場や主張の違いに関わらず、他者と一緒に物事に取り組めるようになった	クラスメイトの異なる意見を知って刺激を受けた
自ら進んで、他者に働きかけ巻き込みながら物事に取り組むようになった	自分の考えの間違いに気づくようになった
自分を理解した上で将来の進路を考えるようになった	授業内容がよく理解できるようになった
物事の問題に対して、自分の力で解決できないかと考えるようになった	クラスメイトの考えが自分とは異なることに気づくようになった
物事の問題解決のために、自分で考えて実際に行動するようになった	クラスメイトに、根拠をもって自分の意見を言えるようになった
物事を客観的に捉え理解できるようになった	自分の考えをはっきり示せるようになった
物事を第三者の視点で分析・考察できるようになった	自分の考えをうまく伝えるための方法を身につけた